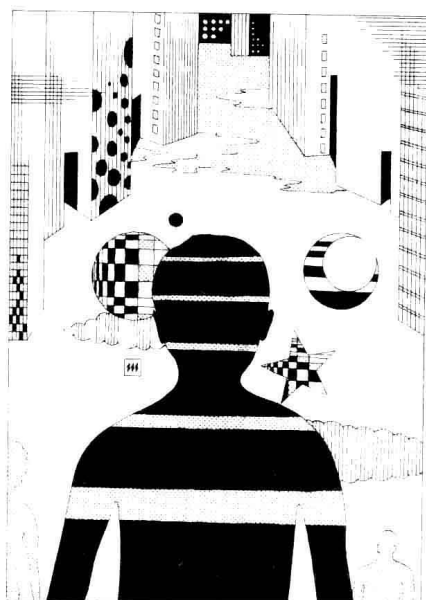


人にわが与うる哀歌

大西 赤人



お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがとうございました。なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
(郵便番号112)

光文社 出版局

人にわが与うる哀歌

¥ 570

昭和47年12月15日 初版発行

著者 大西 赤人
埼玉県浦和市上木崎559-22
発行者 五十嵐 勝 彌
印刷者 堀内 文治郎
東京都千代田区三崎町2-18-11
堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替東京115347 電話 東京(942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(ナショナル製本)

© Akahito Onisi 1972

(分)0-0-93(製)92004(出)2271 (0)

人にわが与うる哀歌

大^{おお}西^{にし}赤^{あか}人^{ひと}



本文イラスト・真鍋博

目次

1 ペーヴメント・ブルース

ある崩潰	9
路上の死	17
二人の男	21
ある日曜日の午後	28
死者生者	34
螢魂	36
交通事故がいっぱい	44
悲しみの遺族	52
ペーヴメント・ブルース	55

Good-bye, Mama

71

小さな公園で

88

バート・ウエストの回心

93

蝶ちようの季節

100

二十一世紀に有り得るべき文芸上の論説

エッセイ

104

フランス人形を下さい

111

Sorry, Wrong Number

114

汚名

122

3 人にわが与うる哀歌

空地にて

141

薄荷ガムをどうぞ

148

雨の日曜日

151

生まれざりしならば

159

松ちゃんとちっぽけ君

162

年賀状

166

無垢の笑い

168

いい加減な僕

172

人にわが与うる哀歌

174

付

僕の「闘病記」

185

奥書き

208

1

ペーヴメント・ブルース

蠅^{はえ}

彼の周囲をハエが群れを成して飛び回り始めたのは、一体いつからだったのか。町の人々は、誰一人「あの日から」とは思い出せない。暑さの厳しい八月初め頃、誰の口からともなく「○○食料品店の息子に、いつもハエがたか^すつてる。」という評判が立ち出したのだ。彼が町の通りを歩くと、擦れ違^すう者からだけでなく、通りの反対側からまで、視線が彼に向かって飛んでくる。彼の周囲を何十匹ものハエが飛んでいるからだ。ハエは、彼の体から一メートル以上は一匹とて離れない。また、彼の体に止まろうともしない。ただブンブン飛び回っているだけである。他の人々は気づかなくても、もちろん彼自身は、この異変がいつから始まったのか、わかつていた。八月の五日。昼下がり、彼は、三十分ほど昼寝をした。そして、目が覚めた時、既にハエは、三匹ほど彼の頭上で旋回していた。最初は彼も

気にしなかった。どこの家になつて、ハエの何匹かは居るものだ。だから、彼の家族も別になんとも思わなかった。

ところが、翌日になつて状態は悪化した。朝、目覚めた途端、彼は、すごい羽音にビックリして飛び起きた。数十匹のハエが、彼の上方に旋回していて、彼が立ち上がると、今度は体の回りにワッとばかりに群がる。度胆どきを抜かれて彼は、両親に助けを求めた。両親は、ポカンと口を開けて彼を見ていたが、我慢し切れずに笑ってしまった。ボケッと突っ立っているパジャマ姿の高校生の周囲を、ハエがグルグル飛んでいるのだ。笑わないほうがむずかしい。

しかし、たちまち笑いは消えてしまった。ハエが離れないのである。新聞を丸めて払ったり、ハエ叩きで殺しにかかったりしたのだが、全然効果はない。なにしろ、どこにも止まらないのだから、叩くのも容易じゃない。そこで、彼は一案を思いついた。風呂に入つて、潜もぐる。ハエが湯槽ゆがねの上方に溜まっている間に、殺虫剤を吹きつける。彼と両親とは、早速それを実行した。作戦は成功した。息が続かなくなつて彼が水面から顔を出したら、ハエはタイルの上などで弱々しくピクピクしているだけだった。

それでも事件は終らなかった。その日彼が、レコード買いに家の外へ出た瞬間、にわかに三匹のハエが彼の所へ飛んで来た。十メートルほど進むうちに、朝と同じぐらいのハエの群れになっていた。彼は大慌てで家に駆け戻った。

「まただあ。」

今度は、皆、考えこんだ。急場はさっきのようにして凌^{しの}げても、要するに根本的原因を見つけないといけない。

「よほど不潔にしているんじゃないの？」

「毎日、風呂入ってるけど。」

別にこれと言う原因も見つからなかった。店の仕事もあり、いつまでも考えこんでいる暇はなく、父親が、断を下した。

「そのうち直るだろう。店の中でハエにブンブン飛び回られちゃ、かなわない。とにかく今は、外に行ってたほうがいいな。」

仕方なく彼は、もう一度家を出た。大通りに入ると、道行く人が目を剥いた。彼は足を早めた。そうすればハエの追跡を振り切れるかのように。しかし、ハエの群れは悠々と彼についてきた。レコード店の自動ドアに入った彼は、たちまち

店員たちの胡散臭げな視線を感じて、レコード購入を諦めた。走って家に帰ると、両親が手マネで「裏へ早く行け。」と合図をする。彼は絶望的になった。ハエは、馬鹿にしたように、相変わらず唸^{うな}っている。

その日から、彼は外に出なくなった。家の中に閉じ籠^{こも}ってしまった。ところが、これに参ったのは家族である。食事時にテーブルの上をハエの群れが飛んでいるのは、あまりゾッとしないう景だ。彼だけは、別の部屋で、一人の食事をするハメになってしまった。

こうして、彼は内でも外でも困り者になった。昼の暑い時間を部屋の中でジッとしているなんて、長くは続かない。彼は、人目を避けるようにして、裏道裏道を辿^{たど}って、町を歩いた。そんなふうにしても、やはり見る人はある。彼の噂が、町中に広がった。特に困ったのは、食料品店の息子にハエがたかっているというので、売上げがガタ落ちになったことだ。両親は、彼を医者に見せようとした。しかし、いくら患者とはいえ、病院の待合室にハエをどっさり連れ込むなんてことは、うまくない。どの病院からも、いろんな口実で診察を断わられた。

彼は途方に暮れた。一時的に追い払うことはできても、すぐ舞い戻ってくる。

虫よけスプレーなんて物さえ使ってみたが、大して変わりはない。そのうち、彼はカッカしてきた。『別に隠れてる必要ないな。堂々と歩いてやれ。』と彼は、開き直り、今までは打って変わって、町の中を闊歩^{かつぽ}し始めた。商店の中にも、構わず入っていった。「出てくれ。」と頼む店も当然あったが、彼は、「ハエと一緒に入ったら法律違反か。あんたの店には、ハエが居ないのかい？　そこを飛んでるのは何？　ここに止まってるのは？　それとも、あれはカブト虫とでも言うんですか。」と逆に突っかかっていった。店内で騒がれるのはたまらんし、それよりも彼と話していると、店の者の回りにまでハエがたくさん飛び交うので、ほとんどの店が、折れてしまった。入店を拒む^{こむ}決定的根拠もなかったから。

そんなようにして、十月に入った。第一火曜に、町の商店代表の店主たちが、彼の家を訪れた。店主たちは、彼によって受けた被害を口々に述べ立てた。

「家の店にお宅の息子さんが来た日は、普通の日の半分程度しか客が来なくなっちまうんだがねえ。」

「どうとかしてもらわなきゃ、お客さんが隣り町の商店街に流れ込んで。それに、町の美観から言っても、ああいう人間にうろつかれていては、非常にマズイ

と思うし。」

「困っているのは、家ですよ。」彼の父親が反論した、「最近はずっと数が増えて、ハエのやつ五百匹以上居るもんで、まずうるさくって。その上、そこら中にバイ菌がウヨウヨしてるような感じはする。そして、おまけに店の売上げは、ほとんどゼロですよ。」

彼らは、何か名案がないかと相談した。

「しかし、原因はわからないんですか。」

「ええ。体の中が腐ってでもいるんでしょうか。なにしろ、医者が見てくれないものですから。」

「そうだ。無理矢理入院させたらどうですか。そうすれば、ハエのこのほうも治療してくれるかもしれない。」

魚屋店主が言った。

「どうするんです？」

「彼には気の毒だが、打撲傷を幾つか作る程度にわれわれで痛めつけるんですよ。理由はどうともつけられる。そうでもしなければ、病院は見てくれない。彼